Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1988, Vol. 35, 97－109.

中年期に子ども喪失体験をもつ婦人のカウンセリングの特徴

田畑　治

Ⅰ．問題と目的

個人のライフサイクル（ライフコース）のなかで，中年期は，結婚，子育て，そして子の親離れによって，人生のもっとも充実した時期を経る。そして再び2人きりの生活に追いやられる一つの節目を迎える。いわば，一つの転換期に差しかかることになる。すなわち人生のクライマックスから，老いに向かい，“下降”に至る年代の節目に当る時期である。現実には，家族サイクルにも変化が現われてくる。つまり子どもの離脱や子離れ期への移行を節目とした変化である。親は，子どもが就職・結婚などによって，分離・独立したりしていく時期になり，親としての最後の役割が要求されたり，またその後親としての役割・責任からの解放によって，これまでの習慣的行動パターンが崩壊していくようになる。特に社会が高齢化に向い，出生数の低下に伴い，女性（婦人）のライフサイクルが大きく変化してきていることに，この特徴は顕著になっている。

中年期は，このように個人のライフサイクルにおいても，家族ライフサイクルにおいても，一つの転換期を迎えることになり，“危機”が肯定的にも，否定的にも生じてくる。このように中年期は，一つの転換期を迎え，新しい生き方と老いや死に向う心構えが求められる。従来から，この時期に発生する問題として，離婚・再婚，アルコール依存症，中年期うつ病，「上昇停止症候群」などが指摘されてきている。

筆者は，心理臨床場面を通して，従来から中高年の女性（婦人）の事例と取り組んできた（田畑，1985，1986）。今回は，主題のように，中年期に差しかかったときに，徐々にあるいは突然に何らかの原因・理由によってその子ども（たいてい青年期の子ども）を喪失した体験をもつ婦人でカウンセリング（心理療法）の援助を求められた事例を報告することになった。これらの事例は，対象喪失からくる“悲哀”の作業が重要なのであるが，その生き方や自らの死への対峙も迫られるだけに，援助過程においても，その痛みの理解だけでなく，死の受容も課題となってくるのである（Kübler-Ross, 1974）。

したがって，本研究の目的は，上記の問題意識のもとに，筆者が経験した2事例のカウンセリング過程を記述し，あわせてその援助的意義を考察することが目的である。

Ⅱ．事　例

事　例　E――“困った事がいっぱいある”という婦人

1．事例の概要

I. N.　女性，既婚。来談時専業主婦。43歳。

1）主　訴

「困っている事が沢山あるので，何か助言いただける分野があれば，一つでもアドバイスを受けたいと思う」であった。

2）家族構成

3人家族である。夫（公務員，大学卒，48歳），本人，次男（高校生，16歳）である。《相談申込票には記していないが長男（当時高校生）が前年早春に失踪し，自殺していることが，紹介者より伝えられている。筆者は，この事実にも注目しておくことにしていた。》

3）問題の発生と経過

本人の陳述によれば，問題発生の淵源は，自分の誕生以前と以降ずっとある，という。本人は「(先祖からの)遺伝子が残っている」ともいう。問題を自覚したのは，高校1年頃，厭世観，人間不信感に陥ってからである。その頃，自殺祈願をしていた。実兄も高校2年時に，ノイローゼで体力消耗し，死亡している。自分の問題は，あまりにも特殊だという感じが強いことである。それが40数年の人生の中で凝り固まってきている。自分はどうしてあんな特殊な反応を他人にしてしまうのだろうか。夫との関係はどうなるのか。「わが家には，とんでもない祖先がいたのではないかと思う。」自分の中にも，そんなものが身についているようである。

対人関係について。①夫との関係。夫とは居ても立ってもいられないくらい，イライラしたり，目ざわりになり，叩き出すこともある。夫には“社会的，常識的な

人間である”と感じる。②近隣関係。隣家の大地主のオバアサンと“相性”がわるい。向うは，こちらを好奇の目で見るし，庭に出て絶えず“監視”している。もう一軒大工の家があるが，いま不況で暇なものだから，よくのぞいたり，監視したり，材木の音をたてたりする。

4）本人への援助目標

本人は来談したとき，夫と同伴してきた。同席面接にしようとすると，途端にイライラした風で，夫を面接室から追い出してしまう。表情も硬く，年齢のわりにフケてみえるし，生きることにあえいでいるという状況であり，パサパサして“女性らしさ”にも乏しい感じがした。

幼少期から，母親は病弱で暗い人であり，父親は物を拾ってきては家に飾り，いじましい人である，という。特に母親とはしっとりとした母－娘関係が結べなかった。父親には拒否的，否定的イメージしか持てないできている。高校1年頃から，抑うつ的，悲観的になり，人間嫌いに陥った。その頃，ある宗教哲学者X氏と巡りあい，“死”を思い止まり，そのとき以降，ずっと今日まで師事してきている。しかし本人は，その師にとって，“お荷物的存在”と感じている。本人は，自分が本来的にもっている力をまだ十分に発揮できていず，自分自身をもて余し，近隣では，変人，特殊な反応をする人で通っている。変な人によく追跡され，敏感な反応をする本人である。

援助目標：①自分に脅威を感じているところから，安全な感じを回復すること，②自分をみつめ直していくことで，肯定的自己像を探り出すこと，③人生に対して積極的な生き方を探究していくこと。

2．本人との面接過程

心理面接は，某年8月7日（初回受理面接）から，翌年6月28日（＃28）まで行われ，本人の申し出で終結している。

ここでは，主題との関連で，主として本人－子どもとのかかわりに焦点づけて記述することにする。なお，面接回数が多いので，全体をⅣ期に区分し，その中での子どもとのかかわりを主に記す。

Ⅰ期：自分の問題の紹介

この時期は，主訴となった自分の困っている沢山の問題について，具体的に表明していく時期である。その問題は，両親との関係，夫との関係，近隣との関係，そして“友だち”との関係，師との関係などである。＃1（8月7日）から＃3（8月21日）までである。

＃1では，子どものことは，次男のことに触れたのみで，長男のことには言及しないままであった。面接者（筆者）は，敢えて触れずにいて，本人はいずれ言及するであろう時機を待ち，見守ることにしていた。

＃2で，大学に聴講生（美術科）として通学しているが通学途中での乗客や学生との対人関係で板バサミ＝身の置き場に困ると表明する。そして本当は‘男性’に見られたい，近づきたい自分であることを述べる。面接の終了ぎわに，初めて長男が自殺して死んだことを，淡々と語ったのが印象に残った。

＃3で，自分が変な感じがする人間であることを述べる。自分の中の変な感じ――‘左脳’はスカーッとしているが，反対に‘右脳’のある部分が重苦しいとき，変なことが起きる。長男に生前その話をよく聴かしていた。変なことというのは，山の中の一軒家に，若い変な人，暴走族がやってきて，自分がその人たちに追いかけられる。そして自分が周囲の人になぶり者になっている。自分にとって安定できる人は，姉と姉のボーイフレンド（＝中年の男やもめ）の2人である。その二人と居るとき安定する。“お父さん”（夫のことをこう呼ぶ）は，ワンパターンで，駄目である。「木はミドリ，花はアカ」としか考えないからである。

この回，クライエントは自分で描いた絵3枚――「樹海」「男性とネコ」「湖面のヨット2隻」――を持参する。「樹海」の絵は，面接後に持ち帰るが，筆者は，東山魁夷の作品『樹霊』（1983作）を連想する。印象的なのは，大樹の手前に若芽の木が一本立っており，クライエント自身か自殺した長男への想いをこめて描いているようにも感じ，黙って見守っておいた。

Ⅱ期：関係の中での自己探究

この時期は，カウンセラーに“不思議な人”だと感じつつ，自分が楽になり，自分の問題を探っていくことを続けていく。クライエントは，感情をこめて話せるようになり，次第に生気をとり戻し，服装に気配りし，化粧もできるようになる。＃4（8月25日）から＃12（11月9日）までである。

＃4では，面接に来るととても楽になり，話すこともなくなってきた。不安がなくなり，根本は変らないが，さざ波が立っているくらいである，という。これからどうやっていったらよいか，生きるコツをアドバイスしてほしい。（→カウンセラー「ここで一緒に，本来の自分を見つめていこう。そして探り，拡げていこう。そして他人との関係でもっと自由になるようにしよう。」と伝える。）前回の絵を診て，“分裂病”と思わなかったか。（→カウンセラー「印象に残ったよ」と絵3枚についてのカウンセラーの肯定的感想を伝達する。）長男のこと

を先生（＝カウンセラーのこと）に診てもらえばよかった。病院のDr.には，自分は不信感をもっていた。《クライエントは，ここで初めて，長男のことを涙ぐみつつ語った。本人は，やはり長男に心の痛みを感じていたのだということが判る。》来談することで，クライエントは安心を感じ，通所途中，通学途中でも乗客や学生を意識しても，カウンセラーが居るということで，それ以上がんじがらめにならないで済むことを表明し，カウンセラーへの陽性転移を示しはじめる。

＃5～＃12。この間に，自分の中に問題が一杯詰まっている。自分の理想は，キリスト教の尼僧か仏教の説教尼になりたい。‘世俗’から離脱したい。自分は高村智恵子の『切り紙』の心境に通じるところがある。幻聴が起こってくる。息子（次男）の嘘言への対応をどうしたらよいか。先生は大学の研究者だろうが，やっぱり不思議な人だ（＃5）。

自分の中に話したい気持と秘密にしたいことがある（＃6）。自分の中にいじましい，嫌なもの―‘性’への関心がある（＃7）。先生（カウンセラー）の何が支えになっているかことばでいえないが，まだ自力でやっていくのは難しいと，最近感じた。“愛情”が欲しい自分である（＃8）。

宗教哲学者X氏にかげりが見えるようになってきた。前向きから，うしろ向きになってきた（＃9）。X先生の法話で，先生は老いられたと感じた。イライラした自分。自分は世間的，社会的常識が欠如している。家庭がありながら家庭をもてなかった。《言外に長男を自殺に追いやったとの罪悪感をほのめかしている発言と受けとめられた。》自分の‘左脳’と‘右脳’がバランスがとれず，指令塔がしっかりとしていなかった（＃10）。

この2週間，‘良いこと’と‘悪いこと’の両方があった。先日，夜中に脳のコールタールのような部分が動いて，厚かましくて，不細工なエネルギーの女の人が動いた。原因が少しつかめてきた。生理の前兆，孤独でひとりぼっち，X先生とのトラブルがあるときなどに，そうなる。異常なことは，美術関係で，細面，マユの長い人，弱々しい人に自分が動揺することだ。“スウィートで，ピュアな人”に心臓がブレる（＃11）。

きのうX先生のところに行ってきて面白かった。男友だち（中年の男やもめ）とケンカした。“お父さん”（夫）と2人きりになったときの話で，わかってもらってきた。上の子（長男）は，中学1年頃からいじめられていた。高校2年時，自分（母親）より，不安・孤独が強かった。上の子に対し，自分は「一寸待って！」といい続けてきた《涙ながらに》。上の子を亡くしてから，自分は，母も止め，妻も止め，幼稚になっていた。下の子（次男）は，高2になり，「大学へ行こうか」といい出した。母は家に居なくてよいのか。（→「しょっちゅう居なくてもよいのではないか。心遣いさえしておけば……」。）（＃12）。

Ⅲ期：歪んだ自己像の明確化

この時期は，カウンセラーの支援に守られて，さらに自己探究を続けていき，クライエントは歪んでいる自己像を把握していくことができるようになる。そして近隣への手伝い，両家の両親を看護したり，小動物（ネコ）を愛頑したりするようになる。＃13（11月17日）から＃22（2月16日）までである。

X先生との関係が回復した。先生も生気があった。脅やかされることも少くなった。安定剤を飲んで，地元の人の葬儀の手伝いに2日間行った。“お父さん”が素晴らしく見えた。お父さんは組織の中で耐えて生きている。自分には，性欲があり，派手好みがあり，それらが原因で人に好奇心を揺さぶられる。それが判ってきた《うれしそうに語る》（＃13）。ここに遊びに来てよいか。家にひとりでいると‘変’になる。ここに逃げてきているみたい。変な男ども，変な女どもがやってくる。自分は変で，歪んでいる。自分たちの結婚のいきさつ――自分は教職1カ月で，視線恐怖に陥り，施設に保母として逃げ込んだ。そこに2，3年勤めて，見合いして，結婚に逃げこんだ（＃14）。

年寄り（＝夫方父親）が家にきた。めんどうが見られるか心配したが，気が紛れてよい。祖母が白内障で近くの病院に入院した為である。前回自分の思い出したくない過去に直面してつらかった。《この間，クライエントは面接を2回欠席したことも，抵抗であったことがわかる。》（＃15）。年寄りは喜ぶが，自分は無理をしている。喜こばせようとしている。（→「無理しなくて，できることやればよいのではないか」。）まだまだ変な自分で，“広大無辺な心境”（X氏の説く）になかなか到達できない。カウンセラーの先生はすべてをお見通しのようで，不思議なかただ。階段を登りきったところまで見通しているみたい。ここ（面接室）では安心である。X先生のところでは，自分が“異質”であるということを意識する（＃16）。

自分の中の変態が他人に嫌がられやしないか。孤独を避けるために，アルバイトか就職探しを希望したい（＃17）。アルバイトに出るというと，姉に叱られた。「1年家に居たのに」と。祖父母を見ていておかしくなった。ネコが3匹いる。大・中・小である。まん中（雄）は，知恵遅れで自分の身のまわりにしかいない。大（雄）と小（雌）は，男の子，女の子を感じさせ，ムズムズとし

て逃げる。ネコも自分に感じて近づかない。‘お父さん’は老化してきた（#18)。

良い面が大きくなったことで，ここで悪い面を話してみようという気持になった。――思い出す最初の記憶――姉に置いて行かれ，泣いている自分をオジサンが助けてくれた。それはあまりに“金ピカ”でまぶしく，自分は落差を感じ，劣等感を感じた。自分の像は，真黒の丸い練炭，墨のようなかたまり，劣等感の人間である（→「練炭も燃えると赤くなる。墨とだけ見なくともよいのではないか。真白にならないにしても，赤く燃えることもあるということ，私もあるといいと思うよ」）（#19)。先回，先生に「あなたにとって（真黒も）重要なこと」といわれ，あとで自分で考えてみたら，そのオジサンに“異性”を見たということだ。それでまた男やもめの人と一人の友だちとして会うようになる。ネコ（小・雌）が爪でひっかかれてケガをした。生き物って厄介ですね。自分の愚痴っぽさ，不満だらけさ。内面はドス黒く不安か孤独だ。自分の父親には，こころがなかった。それをあのオジサンに求めた（#20)。

持参した大学への提出用の作品2点――水彩画「ワビスケ」とクレパス画「卓上の食器」をめぐって話し合う。《美しく上手に描いており，「ワビスケ」にクライエントの女性らしさを感じ，その印象を肯定的に伝える。》きのうは長男の3回忌であった。《わりにあっさりと語る》。（#21）先生には自分をオブラードに包んで出している。どうしても自分の恥部をさらけ出すことに抵抗がある。自分の心の内なる部分をイメージしてみた。“原始人”のイメージがある。自分が不安定なとき，のぞきや暴走族たちが押し寄せてくる。みすぼらしいのは，‘右脳’がよじれているときである。先の絵2枚は，大学でも誉められた（#22)。《面接時にX氏のところでもらってきた宗教誌（某年12月刊）をカウンセラーにプレゼントする。○○院本堂建立に10万円寄附していることや長男の死にX氏が言及し追悼している記事がみつかる。》

Ⅳ期：孤独と同居しつつ一人で歩みはじめる―家庭から職場へ

この時期は，クライエントが家にいるとウワサに悩まされ，見せ物になるとの自覚から，働きに出ることを試みるようになる。そしてカウンセラーとも離れ，一人で孤独と同居しながら，歩み始める。#23（2月23日）から#28（最終回：6月7日）である。この時期は，面接も，飛び飛びになり，不定期であった。

家にいるとウワサ，見せ物にされる。長男の自殺がバレやしないかという心配がある。自分が少し理解をし，楽になってきた。劣等感が減少してきたし，自分で少しコントロールすることができてきた。“お父さん”は間が抜けている。カウンセラーの先生は“不思議なかただ”（#23)。自分はここに来て3分の1くらいハッキリしてきた。ずい分色んな人に助けを受け，人との関係が大切だと思った《クライエントは色んな人との関係について振り返りを行う。》先生は“高くて，深い”，自分は“低くて，浅い”。これから3分の2の歩みを探らねばならない（#24)。

会社に2週間勤めたが，異性（上司）を意識して，止めた。自分にわかってきたこと――①ここに依存し，甘えてきたこと。②自分の愚痴は自分で背負っていかなくてはならないこと。③自分の中の“波”は小さくなったこと，今までは大きすぎたこと。自分に“道”がついてきた。路面はまだゴツゴツしているが。（→「ここでもう少し地ならしをしていかないか？」)。父（実親）が入院し看病したら「お前ゆっくり休め，寝ないといけない」といわれ，うれしかった。今までのあさましい，いじましい父のみを見ていた自分は違った体験をした（#25)。

自分の中の問題はゴタゴタあるが，あまりほじくり起こさないでよいみたい。自分の嫌なこと2つ――①X先生に怒りを感じる，②自分の中の精神的飢えを主人に感じる。これからは，カルチャーセンター《＝絵画教室》に2晩通っていくことにしている（#26)。X先生との関係が悪くなった。X先生と離れてくる感じ。自分はいま絵の方になびき始めている。絵画教室の人たちと共に居ることに安定できることを求めている。まだ職場では落ちつけない。‘普遍’と‘個’ということで親鸞上人の『歎異抄』に「一人にてあらざらむ」ということは普遍＝個ということを表現している（#27)。

最終回は一言で表言すれば『今の自分の心境は，“錆ついたところ”をそれとしてしか見つめていくしかないということ』である。去年大学に聴講していた頃，ずい分先生（カウンセラー）に失礼なことをしていた自分である。（→「どういうこと？」）主人が帰宅する頃，感じる嫌さを，ここで先生に与えていた。（→「こちらは嫌と感じていなかったですよ」）先生は，他の人とずい分聴き方がちがう感じだった（→「不思議な人といっていたね」）今の自分は，仕事は毎日だが，邪魔な音に巻き込まれないように，大手を振ってやっていくわけにはいかない。（→「聴き流せるとよいが……」）自分は特殊な反応をする人間として，これから色んなところに身を置いていくしかない。掘り起こせば因縁は深いと思うけれど。「先生との面接は楽しかったです」（→「遠くからよく通ってこられたこと，当方も会って嫌でなく，楽

しみに待ち受けていましたよ」)「もう終りです」と告げ15分早く終了して帰る（＃28)。《クライエントは，今回電話で終りを告げようと思ったが，直接来室し，自分の現在の心境と今後の身の処し方を伝えて去っていく。当方もクライエントのわざわざ来室しての終結の宣言に誠意を感じ，自分のペースでやっていくしかないというクライエントを支持し，終結することを承諾した。》

事　例　F――“死神”にとりつかれた母親

1．事例の概要

T．S.（女子，高1，16歳）の母親。来談時56歳。既婚。専業主婦。

1）主　訴

「高1の娘の登校拒否について」であった。

2）家族構成

4人家族である。父親（会社員，58歳），母親，次男（大卒，会社員，27歳，未婚），本人である。なお長男は大卒，会社員，29歳，既婚で，近所に独立して一家をもっている。

3）問題の発生と経過

母親の陳述によれば，娘の問題はおよそ以下のようであった。

娘は，本人も希望した高校に入学した。中学時代の親友3人はいずれも不合格であり，別の高校に進学した。1学期は喜んで通学し，成績も上位3分の1くらいであった。しかし，入学当初に心配していた友人関係が夏休みくらいからうまくいかなくなってきた。

夏休み明けの2学期始めから低調になってきた。10月になり腹痛を訴え，1，2回休んだ。そして近医で受診すると大腸炎ということで，胃腸薬ももらってきた。学校に行っても，弁当は残して帰ってきていた。

11月上旬から再び腹痛を訴えはじめた。母親が冗談半分に言っていると，本人は急に大声でわめき出し，「今まで辛棒していた！もう学校イヤだー！」と泣きながら訴えだした。理由は一人親しくしていた友だちが，他の友だちと親しくなり，仲間はずれになり，弁当もその二人同志で食べるようになったためだという。担任に連絡したら，その二人にも話をしてくれ，11月下旬に家庭も訪ねてくれた。

12月上旬の期末試験は休んだ。「欠席中に勉強していないから」，「受けても0点だから」との理由からであった。その後，試験後登校するといっていたが，前夜に微熱があった。翌朝，腹痛と微熱を起こした。体育の出席時間不足とのことで，体育の先生の指示で出席させた。しかし近医で“流感”といわれたのに，無理に登校させた。母親も連絡で学校に行ってみると，体育館内に一人でうずくまって泣いていた。母親も驚くやら，怒りやらを感じた。その後4，5日登校した。

冬休みに各教科の宿題を，と各教科の先生をまわってどっさり宿題をもらった。年の暮れにはノイローゼのようになり，宿題の片づけに睡眠不足のようになった。本人はボヤーンとしており，母親も「半分でいいじゃあないか」と慰めてやっていた。

正月明け早々にひどく悩み出した。「宿題ができていない」「友だちにジロジロみられる。」など訴え出した。

ちょうどその始業式の日，次男の内科疾患の手術の為，母親は総合病院に往復をしており，母親は娘をかまってやれなかった。1月中旬，母親が病院に行った留守中に娘は勉強道具を家の廊下に全部放り出していた。そして「もう学校やめたい！」といってダンボールに詰め始めていた。

《なお，11月中旬に，本人は某医大クリニックを受診し内科→精神科にまわされる。精神科医に受診し，抗うつ剤と催眠剤を投与することになった。医師は，登校する方を勧めてくれていた。その後は，母親が投薬をもらいに2週間おきに行っていることが判明した。》

4）母親の援助目標：

母親は，娘の登校拒否，息子（次男）の術後の看病で両方の子どもにかなり不安や疲労を覚えている状況であった。そのため，心理面接では，①母親自身，面接場面でリラックスし，安定すること，②家族の雰囲気がやわらぐように努めること，の2点を目指して，サポートしていくことにした。

2．母親との心理面接援助過程

心理面接は，某年1月22日（初回受理面接）からほぼ1／W→1／2W→1／3Wと＃9（5月19日）まで続いていた。その後，「次男が回復に向っていた矢先に急性心不全を併発し，6月5日に不帰の客となった」との電話連絡をうける（6月9日)。そして当方も驚きとともにお悔みの電話を入れ，心理面接をしばらく休みにすることを了承する。その後は，手紙による交信が続く。再び秋口になり，当方の呼びかけで面接を再開する（＃10：10月6日から＃12：12月8日)。そしてその後は，母親の申し出により心理面接は終り，再び手紙による交信が続いていった。

ここでは，主題との関連で，母親―娘，母親―息子，娘―息子，娘―小動物（犬）とのかかわりに焦点づけて記述することにする。

I期：娘の登校拒否相談と息子の入院看病とのかけ持ち

この時期は，母親が娘の登校拒否に対する相談に来談

し，あわせてその足で病院に入院加療中の息子の看病に通う時期である。＃1（受理面接：1月22日）から＃9（5月19日）までである。

母親の友だちにいままで娘と外出していなかったのではないかと注意された。娘は目下長期欠席扱いである。家でわりにルンルン気分でいる。自分（母親）は，娘を息子たち2人と同様のつもりに育ててきた。娘は次男にピアノを弾いてあげようと言う。犬好きの娘でもある。思えば11月頃，娘はすっかり根暗に陥ってしまった。次男は日々に快方に向いつつある（＃2）。

娘の休学届をどうしたらよいか。娘の気分は2日良く1日悪い状態が続いている。退屈し，アルバイトを希望する。娘は長男の子どもの子守りをして楽しくしているが，苦労もしている（＝オシッコをしくじらせた。）昔自分は長女で，母代りをし，一切を切り盛りした。娘には息子たち同様，自律させないといけないと頑張らせていた。昔，弁当は自分で作っていた。娘には弁当を下ごしらえして，あとは娘に詰めさせていた（＃3）。

娘はアルバイトやりたがる，人の目におじけづく，バレンタイン・デーのチョコレートを手製で作り，友だちに送り，喜ばれる。入院中の次男に高校くらいは卒業しないといけないと促され，しょげて帰ってきた。過日，休学届を提出した。次男も娘も他人のことに思いやりのある子だ（＃4）。

娘が家庭内では安定し，元気になってきた。思い起こすと，昨年秋2人の子どもが相次いで病気であったときとても心痛であった（＃5）。

学校の担任の娘への処遇について批判する《胸のつかえの吐露》。学校は3カ月ずつ休学する。ディズニーランドに親子とで出かけ，元気はつらつとしている娘。次男に宛名書きのアルバイトを依頼される。次男が登校を促した為，娘は病院見舞いはしなくなった（＃6）。

『一家のどん底』――4月始め，娘はカゼで発熱，次男は急性肺炎になる。犬《MOMOKO》は行方不明になる。娘は浮き沈みの心境である。夫が急いでいて病院敷地内で車の接触事故を起こす。（→「こういうときこそ母親がしっかり情緒的に安定していくことが大切ですよ」）（＃7）。

次男に食欲がでてきてホッとしている。5月の連休中に病院から外泊許可がでた。娘はジンマシン治療のためかかりつけの医院に行くが，看護婦に「学校は1年生か2年生か」と尋ねられ，その晩不眠に陥る。母親としては，期待しすぎてもいけない，失望してもいけない。どんな心情で接したらよいか（＃8）。

娘は，連休以後，次男も院外泊するようになり，明るくなり，精神的に安定してきた。娘が2つの“夢”をみたという。「小さい犬が欲しい夢」「学校に行きたくないのに，先生や校長が家に来て『早く学校に来なさい』といわれた夢」である。小犬には自分の小づかいを7万円全部つぎ込んで買いたいという。いまいる2匹の親子の犬では不満であるらしい。今回この6カ月間は，天の与えた試練，思し召しだとしみじみ感じる母親である。カウンセラーにいわれた「いま船（＝娘）は嵐の中で，港（＝母親）に停泊することが大切である」ことの意味がしみじみわかった（＃9）。

Ⅱ期：息子の突然死，そして喪に服する

――面接中断――

この時期は，母親が息子を突然失い，喪に服するため面接を一時中断する。そしてその後は，手紙によるコミュニケーションを行うことにする。この間に母親からの手紙は4通であった。カウンセラーからは2通の手紙を送った。手紙には，失った息子への想い，娘の兄想いや家での様子，母親の心境がその都度記されている。カウンセラーは，原則的に母親の心情をサポートすることに努める意味内容の手紙を記した。そして日増しに母親は悲嘆や心痛から立ち直るようになっていくことができるようになる。

6月9日に＃10の相談を予定していたところ，母親から相談受付に「入院中の次男が亡くなりましたので，しばらくお休みにさせていただきたい」旨の電話連絡があったとのメモを受け取る。当方もあまりの突然の通報に全く驚き，意外に感じ，お悔みを兼ねて先方に電話を入れる。すると母親が電話に出て，事情を説明する。次男は快方に向っていた矢先に，急性心不全を起こし，28歳の誕生日（6月5日）に，突然逝去したとのこと。一家は大変なショックを受けた，とのことであった。母親としても娘のことがとても気がかりであるが，何とか気持を落ちつかせなくてはいけない，と自分にいいきかせている。当方は，喪中のことであり，長電話は禁物であると考え，当分の間は面接を中断することを了承する旨を伝達した。

翌10日に速達で，前日のお悔みの礼と娘が親友に宛てて出す手紙の内容を見てしまったとのことが記されていた。それは「兄の死のショックで眠れなかったが，絶対泣かない。自分（娘）は幸せだ，兄がどんなときでも見守ってくれている。自分（娘）も一心同体だから，笑っていなくては。これからは父や母の事，兄の分まで見守らなくては。兄は母思いで大事にしたから，これからは二人分大事にしなくてはならない。5月頃，自分（娘）は自殺を考えて，死に場所も決め，遺書も書いていた。でも死ななくてよかった。兄は生命の尊さを教えてくれ

た。今まで弱い自分は，ゴミ箱にポイ。これからは強くなるんだ云々」とのことである。また娘が大検制度のことを聞いてくれといったこと，娘が全部小づかいをつぎ込んで買った仔犬がジステンバーで危篤であるとのことも，母親は記していた（手紙＃1，6月10日）。

大検のことは，友人の主人に聞いてわかったとの電話がかかってきた。カウンセラーが留守中のことであった。当方より折り返し先方に電話を入れる（6月16日）。

先の電話のお礼とまた大変なことになったとの手紙を受信する。可愛がっていた仔犬（シーズ犬）が3週間でジステンバーにかかり死んでしまった。娘はまたショックを受け，沈んでしまった。娘は兄も犬も逝ってしまい，自分も逝ってしまいたいといったりして困ってしまった。あんな手紙を見てしまったので，気が休まる暇がない。四十九日迄は，七日毎にお寺さんや身内がお詣りに来て，気が苛立ってしまい，自分は困っている。来客が涙したりするのが，娘に辛いようだ。犬の方は，保険に入っていたので3カ月以内に同等のものが頂けるので楽しみにしている。夏休みには，気分転換に，海外旅行を夫と3人で計画したい。母親の方が却って気にしてはいけないのか（手紙＃2，6月25日）。これに対し，当方は「子どもに先立たれた親の気持は，誰にもわからないものです」といわれていたことが重くのしかかっていたこと，母親の心労の大変さを察するが，母親自身が希望を失わないように，気持を平静につとめるよう望むこと，仔犬が代りにやってくることを祈る」など返信する（7月10日）。

四十九日の法要を済ませた日に，次の犬が入手できた。娘はＴＶタレントの名前《男性》がいいといって命名した。犬はメス犬である。今度の犬は，とても元気で家中が何となく明るくなった。娘も張り切って世話（便のしつけ）をして，顔の表情も何となくよくなった様子である。山というか峠を越した様な気がする。これからは夏休みに向かうし気長にあせらないようにしたい。9月になったらまた（相談に）伺いたい（手紙＃3，7月28日）。

息子の百ケ日の法要が済み，お彼岸の日に墓地に納骨した。今まで気が張りつめていたが一段落すると余計悲しみが深まってきた。毎日毎日が心の葛藤で励ましたり，辛さを我慢したりである。相談に伺いたいが，病院の方向になるのでまだ足が重い。もう少し心の整理がついて，落ちついたら，相談に伺いたい。9月はじめ，主人と3人で海外旅行をしてきた。娘が毎日家に居ることで，息子の悲しみをやわらげてくれ，何やかや世話がかかり，自分はノイローゼにならなくて済んでいる。娘は，テニスでは息子のトレーナーをはき，ペンダントに息子（兄）の写真を入れ，「お兄ちゃんがついてはげましてくれるような気がする」とカラッと笑って居り，助かる。毎週お墓に犬《ＳＡＭＭＡという》を連れて自転車で走って行く。前のことを思うと，少しずつ元気になっている様な気がし，ありがたい（手紙＃4，9月29日）。これに対し，当方から母親の近況報告へのお礼と心の整理を一人でやるだけでなく，一緒に行う場もあることを覚えてもらって，是非勇気をふるって出かけられ，母親自身の心の負担を軽くすることを願う旨の返信をする（10月1日）。

Ⅲ期：“娘と共に”の毎日――面接再開と終結――

この時期は，母親がショックだった息子の死で悲嘆にくれて家にずっと蟄居し，喪に服していたところから，再び来談し，カウンセラーとの間で，息子のこと，娘のことを話し合う。面接は，この間3回（＃10：10月6日～＃12，12月8日）であった。母親は息子のことで心の痛みをやわらげているが，やはり喪失したことは忘れられず，涙ぐむこともままある。しかし娘のことでは日増しに，元気を回復しつつあることで安心感を感じていきはじめると共に，他方で娘へのしつけの誤りに反省しはじめる。そして娘に感謝の気持さえ，感じはじめる。

息子の死去のあとの毎日の状況につての話《バッグの中の風呂敷包みから，息子の在りし日のヨーロッパ旅行の写真を出して，涙ぐみつつ，悲しみを吐露する母親》。今夏は，初盆で大変だった。他方娘の方は8，9月はプール，旅行で元気にすごした。ここ10月に入って数日イライラしている。娘は，学校のことだけでなく，家庭での息子と本人（娘）への差別待遇されていることを気にしていたことがある，とのことを姪からきき，母親は自省をする。娘は来年3月末まで“休学延長”をしてもらった。しかし娘は復学の意志は全くない。娘は，仔犬と戯れている。仔犬は，娘の小さいときの男まさりそっくりである。ジャンプしたりし，気の太い犬である。娘は，「地震があると，私は犬2匹を両肩にかついで出る。お母さんは位牌と“ＳＡＭＭＡ”（仔犬）を持って出るわね」といっている（＃10）。

娘の最近の写真を見てくれ，といって部屋の中で仔犬《ＳＡＭＭＡ》ともう一匹の犬を抱いてにこやかな顔をしているものを示す。親友2人とも楽しく家ですごしている娘。娘は登校拒否を起こして満1年になる。娘に対して，今までしつけが厳しすぎた，甘えを許さずつらい思いをさせてきていた。自分（母親）は，娘に長唄のケイコもさせていた。娘は，小学校では自分だけだ，とぼやいていたのを思い出す。娘は，イトコに「最近ようやく，お父さんも，お母さんも，自分のことに関心を向け

てきたのよ」といっている由である（＃11）。

先生（カウンセラー）に巡り会えて感謝している。娘はいまが“この世の春”という感じである。毎日好きなことをやり，好きなとき起きて犬を相手にしたりＴＶを見たり，ピアノを弾いたりしている。私（母親）自身の気持や考えが変ってきた。自分は娘が登校拒否になって，逆に救われた気がする。家では，いま娘がいちいち母親に「一寸きてえ」と甘えている。家にいた老犬《ＨＡＮＡＫＯ》が１週間前に老衰で死んだ。娘は喪中ハガキ《次男のときのものを改造》を出した。娘の親友は，老犬の死に触れないでいる。仔犬《ＳＡＭＭＡ》は，相変わらず家の中でひょうきん者の存在である（＃12）。

《母親は，ここで継続面接を終り，３月になったら挨拶に伺うつもりであるとのことばを残して去っていく。》

Ⅳ期：娘の様子と母親の気持との報告

この時期は，母親がその都度，娘の近況や母親自身の気持や心境を伝えてくるかたちで，手紙を差し出すことが続く時期である。またその中には，コンサートへの招待券も同封されていたときもあった。カウンセラー（筆者）はその都度，母親からの感謝の意を感じとり，演奏会にも出かけていったりしたこともある。手紙は，全部で14通（手紙＃５～＃18）である。一番新しいものはハガキになっている。それは母親自身の心境を端的に伝えており，気持も開放的になっている。

ここでは，主題との関連で，息子のことに言及したもののみを取り上げることにする。

先だって息子の一周忌もやっと済ませ，何となくホッとしている。長い，辛い一年であった。娘も今まで一年よく頑張り，法事の時は，お客さまの接待に一生懸命よくやってくれた（手紙＃７：６月８日受信）。これに対し，当方も手紙と遅ればせながら，仏前への供花を送ったところ，手紙＃８（６月18日受信）がきて，コンサートに母親も行き，亡き息子も『禁じられた遊び』の曲が大好きで，よく学生時代にギターを弾いていたのを想い出し，涙が止まらなかった旨が記されていた。

お彼岸に墓参した。いままで娘たちと連休等で遊びに行くことばかり考えていた自分が，お彼岸の意味を考え息子が帰るような気がして好物等を供えたりして辛かった。先日も某所に出かけたら，地下鉄に息子の卒業した高校の制服を着た生徒たちと一緒になり，懐しい制服を見ながら，息子がその中に居るようで，涙がこみ上げてきた。また途中から女子生徒が新学期で賑やかに楽しみ気に乗り込んできて，娘が家でしょんぼりしているかと思うとやり切れなくなり，目を閉じたまま地下鉄電車に乗っていた（手紙＃10，９月25日受信）。

今日は娘の十八歳の誕生日である。朝起床してくると「今日お兄ちゃんの所へ行ってくるね」という。何の事かと思っていると，犬《ＳＡＭＭＡ》を自転車のカゴに乗せて走っていった。お墓詣りである。後姿を見ながら涙がこぼれた。天気がよいので娘の蒲団でも干そうと，ふと白い封筒を見つけ，空なのかとのぞいてみたら次のようなことが記されていた。

「私は強くなりたい。どんな事にでも耐えられる様に，重荷というものはそれを負えるだけの力のある者にかかるものだ。十八才になった今，私は神に誓う。必らず壁を乗り越えてみせると。今私の前にあるおおきなとてつもない大きな壁を私は乗り越えるのだ。私の明日に幸せがくる様に。」

きっとこのことを亡き息子のところに報告に行ったのだろう。私（母親）はこれを見て感無量になってしまった。娘は「お兄ちゃん（息子）のとき（入院時）もっと色々やってあげればよかった。でもあの時一緒に重ってしまったんだもんね」と初めてポツンと涙をみせた。ここまで自分（母）を支えてくれて，本当に感謝している（手紙＃12，11月21日受信）。

このあと，年を越して以降は専ら娘が外に積極的にアルバイトを求めて活動したり，英会話を習ったりして，生き生きとすごしているとの手紙が続いていった（手紙＃13～＃18，ハガキ＃１）。

Ⅲ．若干の考察

ここでは，目的に沿って，以下の３点について考察をすすめることにする。

１．援助者が中年婦人に向かい合う際の態度と視点

中年婦人のカウンセリング面接の場合でも，相手は「いま・ここで何を感じ，どのように生きてき，かつまた生きつつあるのか」ということを，カウンセラーは同寸大の状態で傾聴していくことが必要とされる。相手は，どのような言語的表現をし，またどのような非言語的な表現（たとえば声の調子，抑揚，表情，しぐさ，態度，動作など）をどうしていくかを，カウンセラーは瞬間瞬間正確に感じとり，かつまたそのように感じとられつつあることに，同寸大の状態で反映したり，伝達し返えしていくことが要請される。換言すれば，カウンセラーは，“波間に自由に漂う注意”でもって，二人三脚のような“同伴者”であり，かつまた“一緒に水中を（＝心の中を）旅する心境”でもって慎重に相手に心理的に接触をしていくことが不可欠である。決して焦ってはならないし，深追いしてもならない。温かく，じっと静かに心を空にして傾聴していき，相手の言語的，非言語的表現を通して，強調されたり，変化のつけられた部分に反応したり，応答していくことが求められるのである。

このようなカウンセラーの態度に支えられて，クライ

エントは“自分にかかわる重要な問題”にカウンセラーと共に歩み寄り，より深く問題の核心に挑んでいくことができるようになる。つまりカウンセラーとの対人的基盤のうえにその人独自なものが開示され，心の重荷が降ろされていくことを可能にするようになる。中年婦人の場合も，その人にとっての“自分にかかわる重要な問題”は，必らずしも意識の上で明確に気づくかたちで進んでいくとは限らない。一見とりとめのない自己表現をしたりしていることの中に，重要な意味が含まれている場合もある。

ところでクライエントがカウンセラーとの対人的関係を基盤として，カウンセリング場面で瞬間瞬間自己表現をしていくのであるが，中年婦人の場合は，語られる問題がかなり多岐に渉って拡がっていることである。問題の焦点を，どこに合わせていくか――対人的関係や非対人的関係（＝対物的関係），また誰に合わしていくか――クライエント自身，他者，カウンセラー，カウンセラーとクライエント（われわれ）なども，多様な拡がりをもっている（アイビィ，A. E.，1985）。相手の言語的，非言語的な両側面の全方位角（360°）に慎重にレーダー網を張って受信していき，重要と相手が感じていたりする（場合によっては相手が意識の上で感じていないものがある）のに，焦点をあてていき，応答していくことが肝要である。具体的事例でいえば，事例Eでの宗教哲学者X氏，乗り物の乗客，ボーイフレンド，聖徳太子，親鸞，バイクで押しかける若者，描画（静物画，風景画など），小動物（ネコ）などであり，事例Fでは娘の親友，手製のバレンタイン・チョコレート，飼い犬（老犬），新しく購入した仔犬，旅行先の土地・風物《写真》などである。特に，本報告での主題である子どもの“死”に関する話題には，カウンセラーは無意識的に耳をふさぐ傾向があることを指摘することができるであろう。“暗い”“悲しい”事象に，しっかりカウンセラーは焦点をあてていかなくてはならないことが，本報告でのカウンセラーの態度に要請されたのである。個人的には，筆者自身，本報告事例の面接前，あるいは面接期間中に，肉親《父親》の喪失体験をもっていたので，“死”にはかなり親近的態度でもって，クライエントとかかわれていたことが挙げられるかと思う。しかしこのことも同時に，カウンセラー自身のことと相手自身のこととは感じ方も考え方も全く異るということを自覚し，面接に居合わせることも必要なことは確かである。相手とこちらは，死生観や喪失体験も相当違うということを意識化していく態度も必要である。さもないと，相手の表現する喪失体験を無視したり，押しつけたりする態度に陥るかのどちらかを巻き起こしかねないからである。

2．親が子どもを喪失し，その死を受容していく過程

ここでは，2事例ごとに，この点を考察していくことにする。

まず**事例E**では，来談時には息子（長男）を，すでに喪失している状況があった。また受理面接でも本人自身の問題が前面に出されていた。カウンセラーは，対人的言及をクライエントがその都度していく過程で，そのうち表明されるであろうという時機をうかがっていた。したがって初回受理面接は，申込み状況も含めて，「否認」と命名しておくことにした。

この婦人との面接が進展していくにつれて，次第に当の息子の問題《＝死》が表明され，言及されていった。これを一言表現でシリーズを追っていくと以下のようになる。「抑圧・拒否」（＃2），「後悔」（＃3），「追想・追憶《絵より》」，「医師不信・悔恨」（＃4）「罪悪感・懺悔」（＃10），「悔恨・懺悔＝母親失格」（＃12）「身代り・分身《小動物・ネコ》」（＃18）「息子の死の受容」（＃21）「命寿（みょうじゅ）・欣浄捨身＝X氏の法話」（＃22），「罪悪感・怖れ《就職に際して》」（＃24），「普遍に生きる」（＃27），「自己受容」（＃28・最終回）である。

このクライエントは，子ども喪失体験を，面接初期には，クライエント自身，堅く，無感情で，非人格的な状態であったところから，カウンセリング関係のなかで，次第に柔軟に，感情を表出できるように変容していったことが伺える。また強い劣等感コンプレックスや否定的自己像を抱いていることから，次第に自分自身の位置や状態を発見していくことができたと考えられる。面接後期に「自分の道」（＃25）を表明したり，「錆ついたところをそれとしてしか見つめていくしかない」との自分の心境を語ったりした（＃28：最終回）。これらから，このクライエントの“悲哀”の作業は一応終了した，と判断できるであろう。この背後で支えてきたのは，宗教哲学者X氏の存在であるところも大きい。氏の説く，“命”（ジーバ）や“寿”（アーユス），欣浄捨身の思想は，このクライエントにとって深く偉大な力となっていると考えられる。

つぎに**事例F**は，来談時には主訴にもあるように，娘の登校拒否についての問題であった。息子（次男）は入院加療中であり，こちらの方はカウンセラーとしても二の次のように対応していた。しかし，息子を襲った突然の死神によって，事態は大きく変容し，この家族全体（小動物を含め），奈落の底に追いやられる状況になった。カウンセリング過程での援助は，来談したり手紙によってコミュニケーションをすることによって行われていった。

この母親との面接や手紙交信によって，子ども喪失の

プロセスを，前事例と同様に一言表現で跡づけていくと次のようになる。

「術後看病」（受理面接）「向快方」（＃２）「２人の子どもへの悲嘆・心痛思い返えし」（＃５），「兄（息子）―妹（娘）愛」（＃６），「急性肺炎罹患」「一家のどん底＝事故頻発」（＃７）「再び向快方」（＃８）「院外泊許可」（＃９）で，ここまでが第Ⅰ期であり，母親が娘の登校拒否相談と息子の入院看病とのかけ持ちに精魂を傾ける時期である。

「（息子の）突然死・衝撃・喪中」（電話連絡が入る），「（娘の）頑張り・我慢」「（息子への）追憶」（手紙＃１），「仔犬の病死」「母親の苛立ち」「親子の気分転換（＝気晴らしの旅行計画）」（手紙＃２），「代替仔犬の入手，ヒョウキン者の仔犬」「娘の明るさ回復」（手紙＃３），「百日忌明け・悲嘆一入」「兄と共に生きている心境の娘」（手紙＃４）であり，この間第Ⅱ期は，母親と手紙を通してのコミュニケーションを行った時期である。カウンセラーには，死神に見舞われ続けた母親のサポートに明け暮れた状況であった。この間，他方で仔犬《ＳＡＭＭＡ》が一家の中では“トリックスター的役割”を演じていることも注目していた。この小動物への注目は，前報（田畑，1986）で論じたことと同様の考え方である。

面接再開しての母親とのカウンセリングで「喪失悲哀・想い出の吐露」（＃10），「娘の登校拒否一周年」（＃11）「カウンセラーへの感謝」「老犬の老衰死」（＃12）を語り，継続面接は終る。

再び手紙による交信で，第Ⅳ期に連なっていく。「（息子の）一周忌法要で安堵」（手紙＃７）「追憶」（手紙＃８）「更に追憶」（手紙＃10），「（娘の）決意表明」「（娘への）感謝」（手紙＃12）である。

この母親にとって，二人の子どもが相次いで問題を起こしていき，遂に息子の方を快方に向っている矢先に突然喪失するということは，言語に絶する心の痛みのきわみであった。母親は，「子どもを失った親の気持は他人にはわからない」とも述べたことがある。社会人として活躍していた息子を，入院させ加療中のところ，突然心不全で喪失するということは，死の受容はそう簡単にできるものではない。Kübler-Ross（1974）も子どもの突然死には，親に時間をかけてサポートすることの意義を述べている。しかし，一言表現のシリーズで追ってみて判るように，徐々に「（息子の）死の受容」をしつつあることである。それを援助しているのは，登校拒否に陥っている娘であるし，他方その娘を背後で力強く支えているのは，天に召された兄であり，家の中で明るくトリックスター的役割を演じている仔犬であることもわかる。まことに関係の世界の循環性と不思議さを感じさせる事例である，といえる。

3．中年期に母親が子どもを喪失することの内的意味

一人の母親が中年期になって，その実子をある日突然に不慮の事故や病気によって，喪失することは重大な衝撃である。それまで育み，将来を楽しみにいつくしんできた“我が子”に先立たれることほど，母親にとって悲嘆に明け暮れること，また深い罪悪感に悩まされ，抑うつ的になることは否めない。今日，わが国では戦争で“我が子”を喪失することは無くなっているが，交通戦争や不慮の事故で突然ある日我が子を喪失することは，増える傾向はあれ，依然減少することは見通しが暗い。

本研究では，突然の事故と病気で息子を喪失した母親（中年婦人）の事例をとり上げて，カウンセリング過程での特徴をみてきた。そして事例Ｅでは，ある宗教哲学者の説く“命（ジーバ）”と“寿（アーユス）”いう人間の生命のあり様に二面があるということにも出くわした（稲津，1987）。

“生きるということの裏面は即ち死である”（古田，1988）という。人生後半に差しかかった中高年の時期は，本人自身にとっても周囲の人びとにとっても，“死”に直面したり，遭遇する機会は多くなっている。中年期になっても，母親がその実子を喪失することは“先立たれた体験”を余儀なくされ，対象喪失（小此木，1979）であることには変りない。それが急激に襲ってくる場合は，衝撃もより一層大きい。母親が，子どもの命日を迎えても，心の痛みを覚え，追憶や追想に耽けるのも自然の情というものである。その意味で，心理臨床的援助（カウンセリング）によって，これらの事態での“悲哀の作業”の方法論が，今後ともより一層確立されていかなければならないのである（詫摩他，1988）。

Ⅳ．要　　約

本研究では，個人のライフサイクルと家族サイクルの転換期にある中年婦人の危機の一つとして，突然の事故や病気によって，その子どもを喪失するという体験をもつ事例をとり上げ，そのカウンセリング援助過程での特徴を記述することとその治療的意義を考察することをねらいとした。本研究では筆者が自験した２事例をとり上げた。

事例Ｅは43歳で既婚婦人であった。家族は夫と息子の３人であった。この婦人は，長男（当時高校生）を自殺で失っていることがわかっていた。主訴は「困っている事が沢山あるので，何か助言いただける分野があれば，一つでもアドバイスを受けたいと思う」であった。カウンセリング面接は約11カ月に渉って行われ，28回で終結

した。事例Fは56歳で既婚婦人であった。家族は夫と息子（次男），娘の4人であった。主訴は「娘（高校1年）の登校拒否について」であった。なお来談時に，入院加療中であった息子（会社員）が，快方に向っていた矢先に突然心不全で死亡した。カウンセリング面接は息子の喪に服する期間の中断をはさみ，約10か月の間に13回行われ，それ以後1年半に渉り，19通の手紙による交信を行った。

それぞれの事例のカウンセリング過程は，以下のとおりであった。

1．事例Eでは全部で4期に区分された。Ⅰ期は「自分の問題の紹介」（＃1～＃3），Ⅱ期は「関係の中での自己探究」（＃4～＃12），Ⅲ期は「歪んだ自己像の明確化」（＃13～＃22），そしてⅣ期では「孤独と同居しつつ一人で歩みはじめる――家庭から職場へ」であった。この過程で，クライエントは，初期には息子の死を言及せず，「否認」していたが，次第に言及するようになり，「後悔」「追想・追憶」「医師不信・悔恨」「罪悪感・懺悔＝母親失格」「身代り・分身《小動物・ネコ》」から「息子の死の受容」「命寿・欣浄捨身」「罪悪感・怖れ《就職に際して》」「普通に生きる」「自己受容」のプロセスをたどっていった。

2．事例Fでは，やはり全部で4期に区分された。Ⅰ期は「娘の登校拒否相談と息子の入院看病とそのかけ持ち」（＃1～＃9），Ⅱ期は「息子の突然死，そして喪に服する――面接中断――」（手紙＃1～手紙＃4），Ⅲ期は「“娘と共に”の毎日――面接再開と終結――」（＃10～＃12），そしてⅣ期は「娘の様子と母親の気持の報告」（手紙＃5～手紙＃18，ハガキ＃1）であった。カウンセリングの第Ⅱ期は，母親が突然息子を失い，「衝撃」そして「喪服（中）」に直面する時期である。そして「追憶」「苛立ち」「気分転換」を経る。また購入した“仔犬”がひょうきん者で，一家を明るく支える。「百日忌明けで悲嘆一入」「娘の兄との一体化」が手紙で報告される。そして面接が再開され，「喪失悲哀・想い出の吐露」「（カウンセラーへの）感謝」をもって面接は終了する。その後再び手紙による交信が続き，「（一周忌法要で）一安堵」「追憶」「また追憶」が表明され，母親自身は娘の「決意表明」に支えられ，娘に「感謝の念」をいだき始める。この母親は，息子の死の受容をまだ十分に遂げていないが，徐々に娘が逞しく生き生きしていく過程や仔犬の愛嬌たっぷりの演出で，その悲嘆は癒されつつある状況である。

3．以上の各事例のカウンセリング過程にもとづき，以下の3点について考察を行った。

1）援助者が中年婦人に向かい合う際の態度と視点

2）親が子どもを喪失し，その死を受容していく過程

3）中年期に母親が子どもを喪失することの内的意味

文　　献

古田紹欽　1988　禅僧の生死（しょうじ）を考える　日本心理臨床学会第7回大会特別講演（東京都立大学）.

稲津紀三　1983　改訂新版勝鬘経義疏　三宝（株）.

稲津桂心編　1987　大信海　70号――世界報土実現の因を積む――. 三宝出版部

岩崎吉一監修　大須賀　潔・吉田俊英・木下直之編　1988　東山魁夷展　印象社. 114頁

Ivey, A. E.　1983　*Intentional Interviewing and Counseling*. Brooks／Cole Publishing Company A Division of Wadswarth, Inc.（邦訳：アイビィ，A. E. 著　福原真知子・椙山喜代子・國分久子・楡木満生訳編. 1985　マイクロカウンセリング. 川島書店，109－112頁.）

Kübler-Ross, E.　1974　*Questions and Answers on Death and Dying*. Ross Medical Associates, S. C.（邦訳：E. キューブラー・ロス著　川口正吉訳　1975　死ぬ瞬間の対話　読売新聞社　96－97頁.）

小此木啓吾　1979　対象喪失　中公新書

田畑　治　1985　児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴. 名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科――. 第32巻，105－120.

田畑　治　1986　心理療法における小動物のテーマの治療的意義――子の親離れ・親の子離れに媒介となるケースをめぐって. 名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科――. 第33巻，303－313.

詫摩武俊・樋口和彦・村瀬孝雄・大倉透・星野命　1988　心理臨床における生と死の問題. 日本心理臨床学会第7回大会企画シンポジウム（東京都立大学）.

（1988年8月22日　受稿）

ABSTRACT

Some Characteristics of Counseling with Women Who Have Lost their Children at the Middle Age

Osamu TABATA

A woman, who is now at a transitional period of both individual and family life cycles, encounters a crisis of sudden lost-experience of her child by accident or disease. The aim of this study is to describe some characteristics of counseling processes, and to discuss about it's therapeutic meanings. In this study, we reported two such cases.

The case 'E' was a married woman of 43 years old. The family was consisted of her husband and her younger son. It was previously known that her elder son was lost by suicide. The complaint was her perplexed much problems and to obtain an advice to cope with such problems. The counseling interviews were continued about 11 months, and terminated at 28 interview sessions. The other case 'F' was also a married woman of 56 years old. This family was consisted of her husband, younger son and daughter. The initial complaint was her daughter's problem of school refusal. Additional matter was her son's in-hospitalized problem. He was a business man, and was becoming a gradual recovery after medical surgery. Sudden death, however, attacked him sooner. So, the woman interrupted the counseling for 5 months, and communicated her feelings by means of letters written to the counselor during these periods. The counseling sessions was 13 times, and the letters communicated to the counselor were 18 times and one time a post card.

The counseling processes of each cases were as the followings:

1. The processes of the case 'E' was divided into 4 stages. The Stage I was "Introduction of her problem" (#1 ~ #3), the Stage II was "Self-exploration in Relationship" (#4 ~ #12), the Stage III was "Clarification of distorted self-images" (#13 ~ #22), and the last Stage IV was "To walk alone with lonelines — from home to business" (#23 ~ #28). In these processes, the client initially didn't talk about her son's death, which was understood as "denial" to counselor or death itself. Afterwards, she gradually spoke about the son and his death — the key words were these; "regret", "recollection and retrospection", "mistrust to doctor and remorse", "guilt-feeling and confession as disqualified mother", "pets as substitution of son", "acceptance of son's death", "Myô-ju; Gonjô-Sha-shin", "guilt-feeling and fear before getting job", "living universally", and finally "self-acceptance loading with some disturbances".
2. The processes of case 'F' was also divided into 4 stages. The Stage I was "Going to counseling both problems of daughter's school refusal and son's inhospitalized care" (#1 ~ #9), the Stage II was "Sudden death attacked son, and mother mourning in" — interruption of counseling (letter #1 ~ #4), Stage III was "Living with the daughter everyday" — counseling again and termination (#10 ~ #12), and Stage IV was "Report about daughter's vigorous life and mother's eased feeling" (letter #5 ~ #18 and one post card).

   The Stage II was confronted to the son's sudden death, so the key words were as follows; "shock and mourning". After this was "remembrance", "irritation" and "conversion of feeling — traveling abroad". A 'pet' (baby dog) played humorously and lightly in the home, so the family was supported by it lightly and brightly. Thereafter "more sorrow at 100 days memorial

rituals", "daughter living as one body with the deseased (lost) brother" at later Stage II. At Stage III, the mother spoke "her inner sorrow and remembrance to the lost son", and gave "gratitude to the counselor's mental support". At the Stage IV, the client wrote letters to counselor in every seasons. These key words were "relief", "recollections", "retrospections", daughter's "expression of decisions to live vigorously" and mother's "grattitude to the daughter about her encourage". Although the client has not fully accepted her son's death, both her daughter and the pet cheered up the mother gradually.

3. Concerning to these counseling processes, the following points were discussed.
   1) Attitudes and view points of the counselor to the middle age woman clients.
   2) Processes of parents – losing their children, and acceptance of their childrens' death.
   3) The internal psychological meaning of mothers – losing children in middle age.